

# 王であるキリストの祭日

ルカ23・35-43

皆さん、カトリック教会の暦、典礼暦では、1年の最後にあたる今日の日曜日を『王であるキリストの祭日』と呼んでいることを知っていますか。

今週いっぱい、一年が終わります。次の日曜日から、新しい年が始まります。そうです、来週の日曜日からは、待降節を迎え、新しい年が始まります。

さて、皆さんは、「王」というと、どんな人のことを考えますか。

王冠をかぶり美しい宝石をちりばめた衣をまとった人でしょうか。手に王笏と呼ばれる杖を持っている人でしょうか。りっぱなお城に住んで、毎日、ごちそうを食べ、贅沢に暮らしている人でしょうか。そのために、多くの召使いを持ち、多くの人々が奉仕している人でしょうか。世俗的な力、強い力を持っている人でしょうか？

私が考えついた王のイメージは、このようなものです。みなさんは、どう思いますか。ところで私は「王」とは自分の国を愛し、国民のために生涯を捧げる人であると考えています。

王について私が今思い浮かべる良いイメージの例としては、最近亡くなりましたイギリスの女王、エリザベスがあげられます。個人的には彼女の生き方、生涯が好きです。いろいろな困難に直面しながらも、最後の瞬間まで自分の人生を国民のために捧げました。最後まで自分が約束した言葉を守った人だと思います。彼女は1947年、21歳の誕生日に、次のように述べて、国民に尽くすことを宣言しました。

「私は、皆さまの前で宣言します。長くとも短くとも、私の生涯の全てを皆さんのために、そして私たち全員が属する偉大なる大英帝国という家族への奉仕に捧げます」(1947年4月21日)

今日、私たちは「王であるキリストの祭日」を覚えます。私たちにとってイエス様はどのような王であるか一緒に考えましょう。

確かに福音書が伝える記事によると、イエス様が、エルサレムに着いた時、多くの人々が王として迎えています。(マルコ11.1-10, マタイ21.1-

9, ルカ19.28-40)人々がイエスに期待したのは、力を持った王だったので。しかし、今日の福音書が描くイエスの王としての姿は、この世の人々が想像するものとは全く異なります。

私たちの王であるイエスは、十字架にかけられ、「お前はユダヤ人の王なら自分を救ってみろ」とそこにいた人々にあざけられながら、犯罪人として十字架にかけられて死にました。

金や宝石の王冠ではなく、いばらの冠をかぶせられました。

私たちの王であるイエスは私たちが想像できないような仕方での世に来てくださったのです。彼は、自分自身を低くし、人々のために私たちのために自分の命を犠牲にしたのです。彼は自分の人生のすべてを人々のために費やしたのです。しかも神でありながら、人間となり、私たちのために生涯を捧げ尽くされました。

使徒パウロはこう言います。「**キリストは神であられるのに、神としての権利を要求したり、それに執着したりはなさいませんでした。かえって、その偉大な力と栄光を捨てて奴隷の姿をとり、人間と同じになりました。そればかりか、さらに自分を低くし、犯罪人と同じようになって十字架で死なれたのです。**」(ピリピ2:6-8)。

キリストがこの世に来られたのは、王として、人々を支配したり、力で押さえつけたりするためではありません。「**それは、人の子がきたのも、仕えられるためではなく、仕えるためであり、また多くの人をあがないとして、自分の命を与えるためであるのと、ちょうど同じである**」(マタイ20:28)と、イエスご自身が言われました。今日の祭日に記念したいことは、真の王とは民を愛し、民のために十字架にかかり、自分の命を捧げる、という明確なメッセージが私たちに与えられていることです。

今日、私たちは、自分を救うことなく、私たちのために十字架にかかってくださった王であるイエスに感謝を捧げましょう。また、イエスにならって、私たちも正義と真理を愛することができるよう祈りましょう。

イエスにならい、私たちも日々互いに仕え、平和を作り出す活動ができますように祈りましょう。